



第1章 地域の歴史文化をめぐる情報の共有や交流の促進

木村, 修二 ; 内田, 一徳 ; 増本, 浩子 ; 市沢, 哲 ; 奥村, 弘 ; 山内, 順子 ; 藤井, 保雄 ; 上谷, 昭夫 ; 森下, 徹 ; 西村, 慎太郎 ; 前田, 結城 ; 松…

(Citation)

歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業, 16(平成29年度事業報告書):1-25

(Issue Date)

2018-03-16

(Resource Type)

report part

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010242>



第1章

地域の歴史文化をめぐる情報の共有や交流の促進

第16回 歴史文化をめぐる地域連携協議会 住民主体の〈地域史づくり〉 —平成大合併後の状況の中で—

はじめに

人文学研究科地域連携センターでは、立ち上げ当初から、各年度の終わりにあたり、その年の諸活動を総括することを主眼として、歴史文化をめぐる地域連携協議会を開催してきた。この協議会では、兵庫県内を中心に、自治体職員や大学関係者、地域活動を行っている市民グループ関係者などに呼びかけ、地域歴史遺産の保全や活用などをめぐり、毎年テーマを決めて議論している。

16回目となる今回は、瀧川記念学術交流会館2階大会議室を会場に、「住民主体の〈地域史づくり〉—平成大合併後の状況の中で—」というテーマをたて、人文学研究科および当センターが主催、兵庫県教育委員会およびCOC+ひょうご神戸プラットフォーム協議会、科学研究費基盤研究S「災害文化形成を担う地域歴史資料学の確立——東日本大震災を踏まえて」研究グループ（研究代表者・奥村弘）の共催として開催した。

今年度のテーマの趣旨については、後述の趣旨文に譲ることとし、ここでは当日の進行の状況などを報告する。なお、各報告は報告者執筆による要旨を掲載するが、冒頭の挨拶および質疑応答は、当日の音声採録を後掲するので、そちらを参照していただきたい。

まず、会の冒頭では、内田一徳・本学理事／副学長より開会の挨拶があった。続いて所用のためやむなく欠席となった増本浩子・人文学研究科長／地域連携センター長に代わり、市沢哲・人文学研究科副研究科長が主催者挨拶文の代読を行った。さらに奥村弘・地域連携推進室長より地域連携センターと協議会についての趣旨説明があった。

午前中に行われた第1部の活動報告では、山内順子氏（〔丹波市〕竹田地区歴史資料室研究員）による「地域史講座「歴楽」の取り組みについて」、藤井保雄氏（〔朝来市〕竹田城跡保存会会長）による「竹田城跡保存会の活動について」、上谷昭夫氏（鶴野平和祈念の碑苑保存会）による「鶴野飛行場の跡地をめぐる活動について」、以上三本の報告がなされた。昼休憩の時間には、同会館1階ロビーにおいて、参加者交流会を兼ねた兵庫県内各地諸団体の活動紹介や刊行物展示会が行われた。

午後からの第2部協議会では、まず木村修二（本学大学院人文学研究科特命講師/COC+「歴史と文化」領域コーディネーター）によって本協議会



のテーマ趣旨説明が行われたあと、森下徹氏（和泉市教育委員会）による「和泉市史における合同調査と地域叙述編」、西村慎太郎氏（人間文化研究機構国文学研究資料館准教授）による「地域史づくりの射程—原子力災害とダム建設—」、前田結城（神戸大学大学院人文学研究科学術研究員）より「「棚原モデル」の展開と課題」、松岡弘之氏（尼崎市立地域研究史料館）による「「学ぶ」市史から「調べる」市史へ『たどる調べる尼崎の歴史』をめぐる—』という四本の報告と、大槻守氏（香寺町史研究室主宰）から「香寺歴史研究会の活動」、竹本敬市氏（佐用郡地域史研究会会長）から「佐用郡地域史研究会の活動について」と題したコメントがそれぞれなされた。

休憩を挟んで全体討論がおこなわれた。報告・コメントを通して、いままぜ〈地域史づくり〉がなされるのかの一定の回答として、地域が消滅するかもしれないという極限的な危機のなかで、将来に生まれ生きる子孫のために今記録を残さねばならないという使命感に基づくことが確認された。議論は、事前に提出された質問用紙への回答を軸に進められ、最後に全報告者からのコメン

トと、奥村からの総括コメントで締めくくられた。

協議会の後には情報交換会が開かれ、リラックスした雰囲気の中での交流がみられた。

参加者は、48団体94名だった。参加者アンケートによる感想では、おおむね参考になったという意見が多かった。これは、〈地域史づくり〉を計画している人やグループからの参加があり、関心をもって協議会に臨まれたことを示すといえようが、議論が総括的だったのでより具体的な話も聞き取れなかったという趣旨の感想もみられた。また、感想としてしばしばみられたのは、後継者の問題が課題であるという意見で、活動自体の継続をいかにすべきかという点をふくめ、多くの地域史づくりを行っているグループで共通して抱える問題といえる。また、自治体史誌や博物館、企業などで調査されたデータがエンドユーザーである市民へ公開、利用がなされないまま「死蔵」されている資料が多いことが課題とされる意見もあった。時間不足により、多くの課題を議論の俎上に十分載せきれなかった点に不満を持たれた方も多かった。報告数やテーマ設定を含め、今後の課題としたい。

なお、当日配布した図版データは本報告書には掲載していないが、当日配布した予稿集を神戸大学学術成果リポジトリに掲載する予定なのでこちらも参照していただきたい。

（文責・木村修二）

地(知)の拠点 MUSUBU

主催 神戸大学大学院人文学研究科
同地域連携センター
共催 兵庫県教育委員会
COC+ひょうご神戸プラットフォーム協議会
科学研究費基礎研究S「災害文化形成を担う地域歴史科学の確立—東日本大震災を踏まえて—」研究グループ

第16回 歴史文化をめぐる地域連携協議会
住民主体の〈地域史づくり〉
—平成大合併後の状況の中で—

2018年1月28日(日) 11:00～17:00

神戸大学瀧川記念学術交流会館
参加無料 事前申込制(定員70名)

申込方法 ①氏名、②住所、③電話番号、④Eメールアドレス(お持ちの方のみ)、⑤所属肩書、⑥情報交換会(=懇親会 ¥4000)への参加可否、⑦昼食弁当(¥800)の注文可否を必ずご明記の上、郵便かEメール、またはFAXで、下記までお申し込みください。
※当日、学食は開いていません(構内にコンビニ有)

申込締切 2018年1月22日(月)

※趣旨・プログラムは裏面をご参照ください。
その他、詳しくは、人文学研究科地域連携センターホームページのお知らせをご覧ください。

【アクセス】
阪急電鉄「六甲」駅、JR「六甲道」駅、阪神電鉄「御影」駅から市バス36系統「御影団地」行乗車「神戸大学理学部」下車

神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター
〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1
TEL&FAX 078-803-5566
E-mail area@lit.kobe-u.ac.jp
URL http://www.lit.kobe-u.ac.jp/~area-c/

プログラム

11:00 開会挨拶

内田一徳（神戸大学理事／副学長）

11:05 主催者挨拶

増本浩子（神戸大学大学院人文学研究科長／地域連携センター長）代読・市沢哲（神戸大学大学院人文学研究科副研究科長）

11:10 主旨説明

奥村弘（神戸大学地域連携推進室長／神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター副センター長）

第1部 活動報告

11:20 活動報告①

山内順子（〔丹波市〕竹田地区歴史資料室研究員）
「地域史講座「歴楽」の取り組みについて」

11:35 活動報告②

藤井保雄（〔朝来市〕竹田城跡保存会会長）
「竹田城跡保存会の活動について」

11:50 活動報告③

上谷昭夫（鷦野平和祈念の碑苑保存会）
「鷦野飛行場の跡地をめぐる活動について」

12:05 質疑応答

12:10 昼食・交流会

第2部 協議会 「住民主体の〈地域史づくり〉
—平成大合併後の状況の中で—」

13:10 テーマ趣旨説明

木村修二（神戸大学大学院人文学研究科特命講師）

13:15 報告①

森下徹（和泉市教育委員会）
「和泉市史における合同調査と地域叙述編」

13:35 報告②

西村慎太郎（人間文化研究機構国文学研究資料館准教授）
「地域史づくりの射程—原子力災害とダム建設—」

14:05 休憩

14:10 報告③

前田結城（神戸大学大学院人文学研究科学術研究員）
「「棚原モデル」の展開と課題」

14:30 報告④

松岡弘之（尼崎市立地域研究史料館）
「「学ぶ」市史から「調べる」市史へ—『たどる調べる尼崎の歴史』をめぐる—」

14:50 コメント①

大槻守（香寺町史研究室主宰）
「香寺歴史研究会の活動」

15:00 コメント②

竹本敬市（佐用郡地域史研究会会長）
「佐用郡地域史研究会の活動について」

15:10 休憩・交流会

第3部 全体討論

15:40 討論（司会：川内淳史）

17:30 情報交換会（瀧川会館1階／会費制）
（19:30 終了）

開会挨拶

内田一徳
神戸大学理事／副学長

歴史文化をめぐる地域連携協議会の開会にあたりまして一言ご挨拶申し上げます。本日はご多忙の中また寒い中、本学へおいでくださいます、誠にありがとうございます。神戸大学では大学の地域貢献事業の一環としまして2003年1月にこの地域連携センターを設置し、歴史文化や地域歴史遺産の保全活用を目的とします自治体や住民団体との連携授業を進めてまいりました。その他、農学研究科と保健学研究科にも地域連携センターを設置し広い分野にわたって地域連携事業を展開しております。各事業をご支援いただいております皆様には厚く御礼を申し上げます。

さて、人文学研究科地域連携センターでは各年度の終わりに県内の自治体職員・市民団体代表・大学関係者の方々に一堂に会していただき地域の歴史文化をめぐって議論するための協議会をこれまで15回開催して参りました。今年度の協議会では「住民主体の〈地域史づくり〉—平成大合併後の状況の中で—」というタイトルを付けさせていただきました。このテーマにつきましては後ほど担当の者より詳しい説明がございますが、この「住民主体の〈地域史づくり〉」というタイトルのもと、歴史文化を核とする地域史づくりを実践しておられる方々から貴重なご報告いただけると期しております。今回の協議会を通じまして、地域社会と大学が共同して進めております地域史づくりのあり方についてご参加いただきました皆様と共に話し会えることを願っております。

現在、神戸大学では地域における知の拠点として地域の方々と持続的に研究を進め、新しい世代を育成する場としての役割を求められております。神戸大学では平成27年度文部科学省「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業」、いわゆるCOC+に本学が代表校となりまして、「地域創生に伝える実践力養成ひょうご神戸プラットフォーム」事業が採択されました。これは人文学研究科地域連携センターが深く関わる歴史と文化の領域をはじめとし、自然と環境、子育て・高齢化対策、安全安心な地域社会、イノベーションといった五つの領域におきましてプラットフォームの強化を目指す事業として大学が一体となって取り組んでおります。おかげさまで平成29年4月1日に設立されました神戸大学出版会から「地域づくりの基礎知識シリーズ」の第1冊目として、『地域歴史遺産と現代社会』がこの平成30年1月に刊行され、今日階下でも発売をさせて頂いております。また、お手元の予稿集の中にこのパンフレットが入っていると思いますが、1月30日には出版会設立記念シンポジウムが神戸大学百年記念館六甲ホールで15時から開催されます。どなたでもご参加いただけます。基調講演には漫画家で京都精華大学学長の竹宮恵子先生と神戸大学工学部ご卒業の小説家福田和代先生にご講演をお願いし、休憩時にはサイン会も予定しております。ぜひ多くの方々にご参加いただきますよう、よろしく願いいたします。

さて、本協議会はさきほど述べましたCOC+事業「地域創生に伝える実践力養成ひょうご神戸プラットフォーム」事業の一環として行います。ここでの議論が地域の課題解決につながっていけば幸いに存じます。

最後になりましたが、本協議会を共催していただきました兵庫県教育委員会をはじめ、ご協力いただきました多くの関係者の皆様に対しまして神戸大学を代表して深く感謝申し上げます。この協議会が実り多いものになりますことを祈念いたしまして、私の挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

主催者挨拶

増本浩子
神戸大学大学院人文学研究科長
／地域連携センター長
(代読・市沢哲)

皆さんこんにちは。増本は別の公用で本日欠席しておりますので預かっております挨拶文を代読させていただきます。

皆さんこんにちは。人文学研究科長の増本です。本日は、第16回地域歴史文化をめぐる地域連携協議会にお越しいただきありがとうございます。皆さんのご参加を心より歓迎いたします。本来なら直接ご挨拶すべきところ、他の公用でご挨拶することができず失礼いたします。

今年の協議会のテーマは「住民主体の〈地域史づくり〉」、副題は「平成大合併後の状況の中で」と聞いています。一般的には、地域に残された歴史遺産を守ることは、古いものを守るというイメージで捉えられがちです。しかし、副題が明確に示しているようにこの活動は過去だけではなく、今から続く未来と正面から向き合う活動だと思えます。人口が減少していく、人々が都市に集中する、田舎が過疎化する、災害で故郷が失われる、こういった状況の中で地域の歴史文化と私たちの関係について考えること、それは私達がこれからどういう社会で暮らしていきたいかを考えることと限りなく近いことだと思います。

私自身はヨーロッパに関連した研究をしていますので、大合併と聞くと連想するのはまずEU統合のことです。経済的・政治的に見ると大きなくくりになる方が合理的である一方、文化や歴史という視点から見るとそれは個々の地域の独自性を損なう危険性をはらんでいます。私たちのアイデンティティは生まれ育った場所や暮らしている場所と深く結びついていますから、地域の独自性が損なわれることは私たちのアイデンティティが損なわれることでもあります。そうならないようにEUは多様性の中の統合をスローガンとして掲

げ、加盟各国及び諸地域の独自の文化を尊重しているのですが、それでも離脱や分離・独立の動きがあることはご承知の通りです。EU が拡大すればするほど、またグローバル化という名の均一化・画一化が進めば進むほど、逆に個々の地域の独自性の意識と関心が高まる、ということではないかと思えます。

このように、平成大合併後の状況の中で住民主体の地域史づくりについて考えることは過去のみならず未来について考えることであると同時に、日本のみならず世界について考えることであり、今現在生きている私たち自身について考えることにつながっていると思えます。このような幾重にも意味のある営みに大学が一定の役割を果たせることを私は大変嬉しく思っています。

近年、大学にビジネスとして成功する研究成果を強く求めるような風潮がありますが、大学は目先の利益に惑わされず人間にとって何が大切かを過去から未来に向かって考え続ける場です。とりわけ文学部はそういう役割・責任を社会に対しておっています。文学部の地域連携センターの呼びかけに応じて皆さんが集まってくださったこの協議会が互いの活動から学び合い、私たちが暮らしたいと思える社会について考えるよい場となることをお祈りしております。以上です。

主旨説明

奥村 弘

神戸大学地域連携推進室長／
人文学研究科地域連携センター副センター長

皆さまお久しぶりでございます。1年経ちましたが、今年は新しいテーマ「住民主体の〈地域史づくり〉」を掲げました。

この協議会は、兵庫県内で多様な形で地域の歴史文化に関わってらっしゃる方の具体的な活動についてお互いに話を聞いて、相互に課題を共有していこうとするのが狙いであります。午前中は第1部として活動報告をしていただき、午後からの

第2部は「住民主体の〈地域史づくり〉」ということでテーマを設定しまして、副題にある「平成大合併後の状況の中で」を念頭に置いて議論していきたいと思っております。これにつきましては午後には再度問題提起をしますが、私から簡単に触れておきたいと思えます。

先週の1月20・21日に岡山県で歴史資料ネットワークの全国交流集会がありました。これは自然災害時に歴史資料の保全を進めている全国の方々を中心とした集まりですが、その中で広島県の公文書館の方からご報告がありました。それによりますと広島県では50年前に公文書館を中心として中世・近世文書の史料目録を作っているのですが、それを50年後に再度、どれくらい具体的に把握できるかという調査をしたところですね、なんと3割の所在が分からない。3割はどこにいったか分からない。誰が持っているかも分からないという状態になっている。そういうお話でした。

平成大合併後、急激に行政の担当者が変わり、そして地域の文化を担っていた方の高齢化も進んでまいりました。ご存じのように山間部を中心に空き家率も高くなってきています。そういう状況の中で地域の文書が3割も失われるというのは、そこに住んでいる人々の営み自体が壊れ始めているということを示すものであります。それゆえ、歴史文化に関わる私たちに何ができるのか、を考えることはとても重要な課題として問われるような事態になっていると思えます。

平成大合併によって兵庫県も大きな自治体ができましたけれども、それぞれ地域の文化を大事にした形の新しい枠組みを作ることができたのかということになってきますと、なかなかそこが難しいところだという風に思っただけの方が多いのではないのでしょうか。こうした状況の中で「じゃあ一体どうしたらいいのか？」という問いに対しては、実は県内では既にいくつもの実践例が積み重ねられているように思えます。

15時から休憩・交流会の場を設けておりますので、そこで県内県外の様々な方との交流がす

すめば良いなと考えております。どうしてもそれぞれの地域だけを見ていますと何か点のような形になってしまうのですが、近場や少し離れたところで活動している方々とお互いに交流していけば、活動に資する新しい力が生まれるはずですので、ぜひともこの場を活用していただきたいと思っております。

それからもう一つ、内田理事からご紹介がありましたけれども、『地域歴史遺産と現代社会』という本が出版されました。この本には人文学研究科地域連携センターのこれまでの様々な活動が凝縮されています。ただし、地域連携センターのスタッフの活動だけではなく、地域住民の方々や他の大学研究者も含めたネットワークの中で蓄積してきたものをまとめたものです。是非とも読んで頂きまして、今後の活動における新しい方向性を考えるヒントになれば幸いです。考古学・建物・形文化財に至るまで様々な分野を扱っておりますので、なじみのない分野の勉強のためのテキストとしても使っていただけるような形で編纂しておりますので、是非ともお買い上げいただければと思います。これは神戸大学出版会の1冊目の本となるわけですが、神戸大学出版会は神戸新聞さんと神戸大学の協定に基づいた活動の一つとして設立されたものであり、今後もいろんな本が出版される予定であります。

それから先日、神戸大学と東北大学と人間文化研究機構の三者で災害時の歴史文化を守る協定を結ばせていただきました。こうした協定は、どうしても史料のデータベースを作って公開してみんなが見られるという方向に話が進みがちです。それはそれで大事なのですが、それぞれの地域の中できちんと史料を保存して、そしてそれを未来につないでいく方々がずっと維持されることがもっとも肝要なことです。いくら良いデータベースが完成しても誰も見ない、知らないでは意味がありません。私たちはやはりお互いの活動を通じてネットワークを構築していくことを課題にしていきたいと思っております。兵庫県内の様々な活動がその他の県の方々の活動にも役に立つよう

に地域連携センターとしては広めていきたいと思っておりますので、今後ともよろしく願いたします。

第1部 活動報告①

地域史講座「歴楽」の取り組みについて

山内 順子

[丹波市] 竹田地区歴史資料室

はじめに

筆者が居住する丹波市は兵庫県の中東部に位置し、旧丹波国の一部をなす。本州では最も標高の低い分水界があるため古来より日本海・瀬戸内海両方の文化の影響を受けてきた。平成十六年(2004)、かつての氷上郡(柏原・氷上・青垣・春日・山南・市島)の六町が合併により発足。現在の人口は約6万人である。

六町のうち、柏原、氷上、市島の三つの町に「郷土史研究会」があり各々が調査や発表をしている。また、丹波の森公苑(県立施設)では「丹波学講座」を毎年開催、神戸大学との連携による市教育委員会主催の歴史講座も開かれ、地域史についての関心は比較的高い。その理由の一つは、家や居住地が(少なくとも江戸期から)変わらず、地域史はそのまま自らの先祖の歴史であること、社寺を中心とした共同体が保たれていることが挙げられよう。加えて、自然災害が比較的少なく、空襲などの戦争被害も無く、文書類や地域文化財が残されていることも挙げておきたい。

ただ、従来の講座では、テーマが偏っている、講師の一方的な講演を受動的に聞く、配布される資料が白黒で体裁にバラつきがある、参加者の年代が高い等の課題があった。

これらの課題を少しでもクリアできるような講座を開いてみたい、と松下正和先生にご相談すると同時に、三つの郷土史研究会にも声かけをしたところ、今年度は「市島町」と「柏原町」で取り組もうということになった。

1. 「歴史カフェ」の発想

実際に講座を開くにあたって発想のモデルとしたのは「サイエンスカフェ」である。

というのも、筆者自身が参加して良い意味で衝撃を受けたからである。それは、2015年にコウノトリの郷公園主催の豊岡市のカフェでのものである。郷公園の研究者が繁殖や放鳥後の実態や課題などをカフェの白い壁に資料を映写しながら語った。それに対して、周辺で米を栽培している農業者や、バードウォッチングが趣味の中学生と家族、絶滅危惧種の研究者、筆者のような地域史に興味のある者等多彩な参加者がそれぞれの立場で質問や討議をした。「カフェという場の雰囲気が科学への敷居を低くする」「敬意においては対等の関係で議論」を実感した。

これを何とか地域史の分野でも実践できないか、という思いが原点で、地域の歴史を楽しむ、気楽な雰囲気で語りあうという意味をこめて一連の講座を「歴楽」と名付けた。

2. 実施への準備

①場所

実施主体となったのは「竹田地区自治振興会(市島町)」「柏原自治協議会(柏原町)」という組織である。これらは複数の自治会が集まった組織で、「コミュニティセンター」や「自治会館」という建物を所有している。

従って、場所はこれらのセンターや会議室を使わせていただくことが可能となった。

②予算

自治振興会や自治協議会の予算、丹波市の補助金(市へのプレゼン後の承認、年間10万円上限、生涯学習課や文化財課の予算でなく不安定)を受けることができた。

また、参加者から竹田地区では1回500円、柏原地区では1回300円の参加料をいただくこととした。準備段階で抵抗や批判もあったが、茶菓代・資料印刷代の実費として決定した。

さらに会場の事前準備、当日の受付や会計等について、郷土史研究会の有志やボランティアガイドの方々に協力していただいたことを感謝とともに記しておきたい。

③テーマと講師

「竹田地区」では、地区内に特化した話題について取り上げてほしいとの希望であった。筆者が案内人(講師ではなく)として発表することとした。また、年間10回のうち2回は児童向け講座を実施することとした。

「柏原地区」では、地区を越えて旧丹波国全体に及ぶような内容を希望された。また、観光客が多く交換留学等も盛んな地域であることから、外国語で地域史を語れる講座および資料の要望があった。年間6回のうち、初回は松下正和先生にお願いし、以降は在野の研究者中心に講師を依頼した。

④配布資料

今回の講座でこだわった事の一つは配布資料である。地域史に特に興味がない人でも手に取りやすい資料を目指した。原稿は筆者がエクセルで作成し(柏原地区の場合は講師の資料提供や監修を経て)、松下正和先生に添削をメールで依頼、仕上げたデータはネットプリントを活用しカラー印刷をする、というネット社会だからこそ実現したスピードとコストである。松下先生には丁寧にご指導いただき、内容について一定の次元を保つことができたことを感謝申し上げたい。

なお、二ヶ所での開催であるが「歴楽」という共通性を強調するため、体裁は統一した。

3. 活動の実態

発表にはパワーポイントを使用、美しい画像と分かりやすい紹介を心掛けた。60～90分の講演の後、茶菓で一息入れながら質問や情報交換の時間を設けるという進行とした。

①歴楽 TAKEDA 竹田地区自治振興会での活動

講座ごとに一つの「地域文化財」を取り上げた。ただし、単にモノの紹介ではなく、そこから広がる地域史全体のテーマにも言及するよう努めた。実施日は土曜の10時～12時とし、社会人等にも参加しやすいよう設定した。

第1回5月12日「石像寺の雲版・半鐘と丹波の鋳物師」(江戸期の地元鋳物師について、昭和十七年の供出)

第2回6月17日「清菴寺の絵馬」(絵の解題、晴雨祈願の寺であることから早魃・洪水の災害史料ともなり得る)

第3回9月16日「一宮神社の龍」(本殿の装飾彫刻の龍などの木彫が神社文書や彫刻師覚書から新旧混在であることが判明)

第4回10月28日「石像寺の瓦製香炉と瓦製獅子狛犬」(瓦製立体作品を通じて鬼師の存在と交流が明らかに)

第5回11月25日「伊都伎神社の獅子狛犬」(狛犬台座と文書から宮講の設立経緯や実態、出征者名簿から宮講解散の原因を探る)

第6回12月16日「萩原家が運んだ京の香り」(当地区江戸期の公卿領主・萩原家がもたらした大和錦が宮中から下賜されたと裏付られ、独自の穏やかな支配の一端が見えた)

第7回1月27日「土田和泉守の鎧と兜」(土田家から歴史資料室に託された鎧兜は当世具足で土田家先祖の年代と合致、一族の先祖崇敬を紹介)

第8回2月17日「『大野唯四郎日記』を読む」(児童福祉の先駆者の日記の翻刻公開と施設設立前夜の社会情勢)

参加者数は1講座あたり平均39人であった。

当日提供する「お菓子」については、当地に関連ある店や商品を選択した。例えば、地元洋菓子店の丹波栗入りのパウンドケーキ、寺の名とイラスト入りの瓦煎餅など。

歴楽 kids (児童向け夏休み講座)

地区の小学校の校長先生に協力を依頼してチラシを配布、受講者を募集した。講座の成果は宿題である自由研究として発表した。

受講者は6年生3名(学年児童数31名中)で、7月22日に小学校近くの神社と周辺の現地調査を行い、その後4回の討議を経て発表資料を完成させた。

一人は「鳥居」に興味を持ち、鳥居の分類からアジアにおける集落境界門と鳥の関係性についても考察。一人は「社殿の装飾彫刻」に興味を持ち、棟札等から彫刻作製年代の推定にも言及。一人は「本殿や拝殿等の変遷」について興味を持ち、絵

図や古写真、棟札から境内建物の改築時期や内容を明らかにした。

②歴楽 TAMBA 柏原自治協議会での活動
場所の都合で金曜開催となった。

第1回5月19日「古文献や錦絵にみる丹域の特産品」松下正和先生

第2回7月21日「丹波にオオカミが居た頃—狼信仰と狼型狛犬—」山内順子

第3回9月22日「おもてなし English in TAMBA」久下ゆか子

第4回11月17日「社寺彫刻で巡る丹波」白石雅之

第5回1月19日「丹波地域の美しい石垣」井上正直

第6回3月23日「丹波地域の洋風建築—先駆者内藤克雄の仕事—」内藤正克

参加者数は1講座あたり平均35人であった。

4. 活動の成果

まず、参加者の幅が広がったことである。特に竹田地区では10代~80代にまで年齢層が広がった。土曜開催、kids 講座の参加者が夏休み後も親世代と参加、が要因である。柏原地区では近隣地域からの参加者が増加した。

次に「お茶とお菓子」の効力か、質問や情報交換が活発になった。例えば、竹田地区第7回土田和泉守の鎧兜の日には、土田家の年長者が「和泉田」という一族の田や所縁の地名があったことを語ってくださった。

また、講座終了後にも情報が寄せられるようになった。例えば「消防団倉庫に古い半鐘がある」等多くのデータが集積しつつある。

さらに、配布資料を神社の祭礼などでも活用していただき、累計で130冊を頒布することができた。

5. 今後の課題

参加者が増加した事はありがたい一方、当所指した「カフェ」の雰囲気を作れているかの検討とともに、開催場所を広げていくことを考えたい。ネットの活用による情報配信も今後取り組むべき課題である。

また、同様の取組をされている他地域の方との連携や、大学の先生方との連携を強め、「歴楽」が地域に定着するよう努めて参りたい。

第1部 活動報告②

竹田城跡保存会の活動について

藤井 保雄

[朝来市] 竹田城跡保存会

1. 竹田城

竹田城の歴史と保存管理の経緯については、次のとおりである。

- ・慶長5年(1600) 廃城となる。
- ・昭和14年 竹田町の所有となる。
- ・昭和18年 国史跡に指定される。
- ・昭和31年 町合併により史跡指定地周囲が民間に売却される。
- ・昭和46～55年 石垣修理事業を実施する。
- ・昭和51・52年 保存管理事業を実施する。
- ・平成5～16年 史跡周囲用地の公有化を図る。
- ・平成21年 主郭部周囲・山ろく部居館跡推定地が国史跡に追加指定される。
- ・平成28年 史跡竹田城跡保存活用計画を策定する。

2. 竹田城跡保存会の発足

竹田城については、石垣修理工事が終了してほぼ築城当時の姿になったが、見学者は年間数千人であった。当時の和天山町として、竹田城跡を保存し広くPRするため、昭和63年に竹田城跡保存会が発足した。会員は町民、区役員、町職員等140名である。

3. 竹田城跡保存会の活動

①研修会

毎年、総会時に講演会等の研修会を開催している。竹田城の遺構・歴史を中心に、竹田城の保存活用、地域の歴史と文化を活かした街づくりなどをテーマとしている。

②視察研修旅行

城への理解を深めることを目的に、竹田城と同時代の山城や最後の城主である赤松広秀関係遺跡、さらに竹田城と関係する城跡等を中心に実施している。これまでに城跡31か所とそれに関連する遺跡・施設を見学してきたが、通常の観光旅行では訪れないところが多く、楽しみにして参加する会員が多い。

③町内史跡見学会

市内には、南北朝期から戦国期の山城が30か所以上確認されており、縄張り図を手にして現地見学会を開催している。実際に現地を踏査することで、城と地域の歴史への関心が高まっている。

④会報「竹田城」の発行

会員の研究・活動発表の場、竹田城跡保存会の活動報告の場として、平成5年から毎年1回発行している。今年度第25号を発行予定である。

⑤清掃活動

竹田城登山道及び中腹駐車場を長年にわたり清掃してきたが、観光客の激増に伴い市が管理することとなった。竹田城の居館跡と推定される法樹寺境内の赤松広秀供養碑と、自刃した広秀の霊を弔うために祀られた鳥取市湯所の赤松八幡宮の清掃を毎年行っている。

4. 今後の活動

①会員の事業への参加を促す

事業への参加者が固定化・高齢化していることもあり、視察研修旅行は多くの人々が参加し易く、興味をもてる城跡の見学を計画する。講演会は新聞掲載、チラシの配布等により広く地域住民へ周知を図る。

会報発行については、会員の研究・活動発表の場としてより多くの会員に寄稿を働きかけ、竹田城に関するだけでなく、竹田及び地域の歴史・文化についても広く取り上げながら編集する。

②会員募集

現在会員は90名である。高齢等による退会もあるが、講演会や研修旅行参加者からの入会があり、会員数はここ数年大きな変動はない。保存会の事業・活動を周知するなかで、口コミによる入会を募っていく。

③他団体との連携

竹田城跡ボランティアガイドと事業を共催するなど連携を深めたい。昨年初めて、山城の整備を行った自治協議会と共催で山城見学会を実施した。今後、他団体との交流を図りながら事業を計画していきたい。

④地域における役割

これまで会員を対象に事業を実施してきたが、近年講演会・研修視察旅行については地域住民にも広く参加を呼びかけている。竹田城はもとよりこの地域の歴史・文化のすばらしさ、大切さを広く伝えていくことが重要であると考えている。

第1部 活動報告③

うずらの 鶺野飛行場の跡地をめぐる活動について

上谷 昭夫

鶺野平和祈念の碑苑保存会

はじめに

JR 加古川線を北上すると、JR 粟生駅に着く。この駅は北条鉄道と神戸電鉄が相互乗り入れをした利便性があるが1時間に1本と少ない。しかし復路は上りの北条鉄道に乗れば、加古川線に接続してあまり待たずに乗れて便利が良い。ディーゼルカーに乗り10分ほどで「法華口駅」に着く。大正4年(1915)3月に鉄道開通と同じくして出来た駅だ。古い木造の駅舎、ホーム、便所いずれも開通当時と変わらない。多くの人達が朱印帳、軸をもち西国二十六番札所の法華山「一乗寺」に詣でる。信仰の雰囲気漂う。駅舎の中にパン工房の「モンファボリー」(フランス語で「おもてなし」の意味)のお店が米粉のパンを作り販売している。時折喫茶店の役割もする待合室は、乗客以外の買い物客の談笑の場でもある。

この駅から10分ばかり歩くと、木立の茂る森に入る。この場所こそ73年前の太平洋戦争も熾烈を極める昭和18年(1943)10月に開隊した姫路海軍航空隊の跡がある。

1. 事業所の設置と軍人との出会い

高砂市に住む私がこの飛行場に拘わるとは思いもよらなかった。昭和50年(1975)、勤務する会社が滑走路脇に営業所を建設したことが飛行場とのかかわりの最初である。毎日のように自衛隊隊員が自動車の訓練をする。対空戦の射撃訓練もある。ときに若き警察官が盾を持ち走る。滑走路は時代こそ違えど若者達の訓練場だ。

このようなことを見ながら仕事も忙しく事務所に居る事が少なく月日が過ぎた。平成5年(1993)の夏、事務所にいることが多くなったある日、3人の60歳?柄身の元海軍軍人が事務所に入ってきた。「私たちは元海軍兵として戦時中この飛行場にいたのです。本部庁舎ほどの辺りにありましたか?川西航空機ほどの辺りに在りましたか?」と言われたが知る由もなかった。一応皆様方の住所等を聞き、解ればお知らせしますと伝え、帰られた。

2. ふたたび飛行場が蘇る

平成5年、年末に加西市が鶺野飛行場跡で空のスポーツ「スカイパークフェスティバル」を開催すると新聞で報じられた。かの航空隊に居た人達に連絡。彼らは戦後、戦友たちの消息を探していた。航空ショーを知った戦友が来るかも知れない。会場で我々が集まる場所として、テントを設置して貰えないか?と市役所にお問い合わせすると、市役所の職員から承諾の連絡があり、テント1張を設置してくれた。

航空ショーが始まった。沢山の人が私たちのテントに集まってきた。航空隊、川西航空機の関係者たちである。戦争当時の話で賑わっている。私はこの様子を見て、飛行場の史実を調べるきっかけとなった。戦争が終わって50年経った時だった。

3. 資料調査を始める

地元の人達からの聞き取り、航空隊の人達探し、川西航空機関係者と会い、多くの証言を集め、資料を精査するため防衛庁戦史図書館に通い、残された記録探し。時間のかかる作業であった。

マスコミは終戦の8月には記事にするため取材に来る。神戸大学農学部の敷地は航空隊の兵舎、

格納庫跡や、防空壕が沢山ある。これらを大学の職員と一緒に探し写真に収め、加西市役所で初めて公開展示をしたのが平成8年12月だった。市民の反響は大きかった。以来、毎年飛行場関係の資料が集まれば展示をする。誰の支援もなく、これが15年間続いた。

4. 飛行場のガイドと北条鉄道ボランティア駅長 そして講演活動

加西市商工観光課で、バス会社と連携してツアーを行うことになり、そのとき初めてガイド役を務めた事が口コミとなり、各地から訪れる人達が増えてきた。子供達に戦争の悲惨さを教えて欲しいと言われることもあり、私が戦争中に体験した話を、子供達にも解るように学校に呼ばれて話す機会も増えてきた。

65歳になり会社から退職勧告があり、兵庫県の高齢者大学(「いなみ野学園」)に入学、研究発表に飛行場の事を書いた。その発表したことが、講演に繋がるとは思いもよらなかった。一般にすれば変わった話だが、戦争中にあった郷土の飛行場の話には皆さんは興味をもった。

これも口コミとなり、各地の高齢者大学から依頼がある。また、テレビ取材も各局からあり、撮影協力をする。鶉野が知れ渡ることになった。

12年前、赤字で悩む北条鉄道の無人駅の駅長の公募があった。「法華口駅」駅長の条件を付け応募、これが凄く競争であったが、晴れて「法華口駅」駅長に選ばれた。

この駅がたどった歴史にも興味をもった。駅でのイベントをする。鉄道の体験乗車と飛行場のガイドも合わせておこない、鉄道活性化の一助と、これらがまた人々に知れわたるようになった。

5. 飛行場がまちの活性化を助けるか？

平成27年(2016)、新市長になり、飛行場跡の滑走路を防衛省から買い上げの話が進み、28年晴れて購入。飛行場の戦跡の購入、飛行場にたどる散策道の整備もすすみ、加西市は飛行場を核に観光施設に向け事業をすすめていくことになり、ひいては人口増に繋がると意気込んでいる。

6. 特攻戦没者の追悼

しかし、われわれ日本人として忘れてはならないことがある。第二次世界大戦で各国の戦訓で日本だけがおこなった戦法、飛行機に爆弾を積み機体諸とも敵艦船に体当たりをする戦い、生還の無い戦い、これはまさに「戦いの外道」(げどう)と呼ばれる特攻隊の編成であった。昭和20年(1945)4月から始まった沖縄の戦いで姫路海軍航空隊の若者達(17歳から26歳)が出撃し、63名が帰ってこなかった。戦後50年が経ち、生存された隊員が彼らを悼み慰霊碑の建立の相談を加西市に来られた。それに賛同した市民有志や、航空隊に所属した皆さんの浄財で滑走路脇に、平成11年(1999)10月、加西市長揮毫の「平和の祈念碑」が建立し、以後、毎年10月には戦没者を悼み「平和の祈念祭」が執りおこなわれている。これらの行事は「鶉野平和祈念の碑苑保存会」の主催でおこなわれ、メンバーとして、戦史の担当と遺族の皆様のお世話をするようになった。

7. 戦争遺跡をめぐる

飛行場をめぐる説明は、まず歴史の証人「法華口駅」から始まる。大正4年(1915)3月に播州鉄道が開通と併せて完成した木造駅舎だ。3年前、有形登録文化財に指定された。駅舎、便所、ホームの3箇所が対象となり歴史の重みがある。ここを起点に案内をする。飛行場に向かう道路が整備され車道と歩道が色分けされて歩きやすくなり、道路脇の素堀の防空壕や頑丈なコンクリートの衛兵の退避壕、対弾構造の爆弾庫、衛門、歩哨小屋、展示舎、トイレ、対空機銃座の構造、奥深いコンクリート壕、特攻隊の隊員が別れをした駐機場(前庭)跡広場、自力発電室(地下5m、奥行き17m)、幅5mの強固な壕(航空隊最大の防空施設)、それに日本で一つとなった滑走路跡がある。

以上の施設の案内図、ガイドブックの作成、飛行場の記録、保存された遺品の収集、あとわずかの人生の戦争体験者の聞き取り調査と、自分もその渦中に入るのもそう遠くない事を思いながら。

275㎡の広大な広場が大きく変わろうとしている。5年計画も後3年を残す。

おわりに

戦争遺産を始め、死に直面して書かれた遺書など戦争がいかにか悲惨であったか、いまを生きる我々多くの国民は戦争を知らない。73年の平和は一朝一夕に与えられたものではない。310万人の貴い犠牲の上にある。そのことを思い、平和の大切さを感じとってほしいと思う。その思いを馳せるところが鶏野台地である。

いつまでも平和が続くことを祈念して…

第2部 協議会「住民主体の〈地域史づくり〉

—平成大合併後の状況の中で—

テーマ趣旨説明

文責・木村 修二

神戸大学大学院人文学研究科

今回の協議会のテーマは、「住民主体の〈地域史づくり〉—平成大合併後の状況の中で—」とした。神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターでは、「平成の自治体大合併」がピークを迎えつつあった2004年度と2008年度の地域連携協議会の場で、大規模合併が地域歴史遺産の保存・活用にもたらす影響をめぐって議論している。その際、『香寺町史』と新・姫路市との関わりが議論されることはあったが、大合併後の状況の中で地域史づくりのあり方をめぐって直接議論が及ぶことはなかった。地域史づくりの新たな傾向をめぐっては、むしろ2012年度の協議会で取り上げており、叙述の問題も含め住民と自治体、大学とがそれぞれ平等な立場で地域史を学びあう必要性が協議された。こうした協働による地域史の学びあいのうち、とくに地域住民が主体となるものを〈地域史づくり〉と表現しておく。

その後も私たちは〈地域史づくり〉の問題を考える上で注目すべきケースを経験し、また見聞も重ねてきた。そこで今回はそれを前提に次のような論点を設定することにした。

まず第一に、自治体史誌編さんにあたり、自然環境や生活環境の同一性に基づく独自の地域設定

がなされるケースがみられる。たとえば現在も編纂が続けられている『和泉市史』において叙述上の領域単位として「谷」への着目がなされたり、『香寺町史』において「山手」「台地」「川手」といった地域区分がとられたことなどが挙げられる。これらは、自治体としての領域を必ずしも自明視せず、その地域がたどってきた歴史や住民の生産活動、そして生活実感に基づいた領域感覚に着目した結果と考えられる。その背景には、平成の大合併で、大規模な合併が実現したにも関わらず、現実の地域社会には合併直前の、場合によっては江戸時代にまで遡るような領域感覚が根強く維持されていたことがあると思われる。

第二に、字誌のように住民の日常的な生活感覚に根ざした地域史づくりが地域住民自身の手でなされるケースも増えてきた。こうした動向も基礎自治体の広域合併によってもたらされた新たな自治体の領域や枠組みが、住民の日常的な生活領域と大きくかけ離れたことの反映ではないかとみられる。両者がかけ離れたことで、より一層過疎化や人口減少といった問題に拍車がかかるのではという地域社会維持への危機意識が住民自身に生じた可能性が考えられる。危機意識が地域史づくりの契機となったケースとしては、福島第一原発事故による放射性物質の放出・拡散により放射能の高濃度汚染被害をうけ、住民の離散を余儀なくされているような地域で、地区の歴史を叙述しようとする地域史づくり活動が複数見られることも注目される。近年、頻発する大規模自然災害に全国各地の地域社会が直面しているが、そのような極限状況も含め、地域史づくりがなされる背景には、やはり地域住民の間で地域アイデンティティの喪失への危機感があるものと考えられる。

第三に、〈地域史づくり〉における「継承」「継続性」もいま課題になりつつある。それは、少子高齢化に伴う担い手の喪失という日本社会全体の実情がもたらしている面もあり、包括的に協議していくべき問題群でもあるが、小中学生を含む若者や中高年の主体的な学びのなかで地域の歴史への着目を促そうとしている尼崎市の事例は、「継

承」「継続性」の問題を考える上で大いに参考になると思われる。

以上のように、〈地域史づくり〉のきっかけや実際の活動、継続性の問題といった論点をめぐって考えることを通し、地域社会と大学が協働して進める〈地域史づくり〉のあり方とはいかなるものであるべきかを協議してゆきたいと思う。

第2部 報告①

和泉市史における合同調査と地域叙述編

森下 徹
和泉市教育委員会

大阪府和泉市は、1956年1町6村が合併して誕生し、1960年に1町1村を編入して現在に至る。市史編さん事業が始まったのは1996年のことで、ちょうど、織物とみかんの街から郊外住宅都市へと変貌を遂げつつあった時期にあたる。とはいえ、60余あった近世村の単位は、いまも町会として機能している。また、合併前の旧9町村の単位は、連合町会や小・中学校区あるいは氏子圏に近似し、これらも、また大きな意味を持ち続けている。

市史編さん委員会では、1998年に「市史編さん大綱」をまとめ、地域の生活構築の歴史を総体的に明らかにすることを編さんの目的とし、地域叙述編5巻、テーマ叙述編3巻、通史編1巻の全9巻構成とすることを確認している。

地域叙述編とは、市内を5つの地域に区分し、それぞれの地域の特徴を描き出そうとしたものである。横山編『横山と槇尾山の歴史』は、槇尾川上流の横山谷（旧横山村・南横山村）の歴史を、槇尾山施福寺の寺院社会という観点から描いている。松尾編『松尾谷の歴史と松尾寺』は、松尾寺との関係を中心に松尾川流域に位置する松尾谷（旧南・北松尾村）の歴史を明らかにした。池田編『池田谷の歴史と開発』は、槇尾川中流域に広がる池田谷（旧南・北池田村）が対象で、河岸

段丘上に展開された開発の歴史を軸にまとめた。信太編『信太山地域の歴史と生活』は、信太山丘陵をめぐる人々の生活を基軸に描いている。対象は、旧八坂町・信太村が中心だが、丘陵周辺部の他町村にまでその視野は広がっている。府中編の編集はこれからだが、槇尾川・松尾川下流平野部（旧和泉町）が対象となる。

最後に、地域叙述編を編さんする上で、毎年夏に、大阪市立大学と合同で、一つの町会を対象に取り組んでいる合同調査が大きな役割を果たしていることを付言しておきたい。近世村＝大字＝町会についての総合的な調査研究の積み重ねを通じて、5つの地域の特徴が浮き彫りとなり、地域叙述編の豊かな叙述につながっているといえよう。

このように、地域叙述編の5つの地域は、およそ複数の近代行政村をあわせた範囲となっており、先述のように、現在の校区や氏子圏とも親和的で、多くの市民の方にも、より身近な地域の歴史として受け止められているように思われる。

ぜひ、地域叙述編を手にとりいただき、ご批判いただければと思う。

第2部 報告②

地域史づくりの射程—原子力災害とダム建設—

西村 慎太郎
人間文化研究機構国文学研究資料館

本報告では、①福島県浪江町赤宇木地区あこうぎ記念誌編纂に関する報告の代打として福島県浪江町うげど請戸と双葉町もろたけ両竹における地域史づくりを検証、②「住民主体の〈地域史づくり〉」というテーマに則した視角のうち、報告者の地元・東京都西多摩郡おごうち小河内の地域史にまつわる視角を①とすり合わせる、③平成の大合併後というテーマに則した視角を①②とすり合わせることを課題とした。

福島県浪江町請戸と双葉町両竹はいずれも福島第一原発事故以降帰還困難区域となり、また復興祈念公園造成のため、地域の歴史と文化の継承が困難になっている。前者は2018年に蕃山房より

『ふるさと請戸』を出版し、後者はNPO法人歴史資料継承機構じゃんぴんによってクラウドファンディングを利用した保全と出版が計画されている。

他方、昭和32年に竣工された東京都の小河内村の場合、東京都は小河内文化財総合調査を実施するが、いま小河内村民の子孫たちが郷土を理解することができるのは東京都水道局運営「奥多摩水と緑のふれあい館」1フロアのみである。どんなに歴史や文化の継承に努力を払っても、子孫たちに継承することの難しさがある。

地域の歴史と文化を保全するという視点で言えば、郷土史も大きな岐路に立たされている。例えば、新潟県安塚町の場合、平成の大合併によって上越市の一部となり、地方自治法に基づく地域協議会が設置され、独自の自治運営ができたが、大幅な権限縮小と「選択と集中」によって、行政機能は低下し、それは地域の郷土史衰退を招こうとしている。実際、近年の全国的な教員と文化財担当者の多忙化、地方国立大学人文・教育学部の再編によって郷土史の衰退が顕著となっている。地域の歴史と文化を次世代に体感させるために大いなる利用も促進されるべきだが、観光重視の短絡的文化財保護法改正によって、保存の危機と利用価値による差別化が懸念されよう。

第2部 報告③

「棚原モデル」の展開と課題

前田 結城

神戸大学大学院人文学研究科

はじめに

報告者は2010年10月に地域連携センターのスタッフとなって以来、兵庫県丹波市を中心に民間所在史料の保全・活用業務に従事してきた。とくに最初に担当した同市春日町棚原地区での史料保全・活用業務はその後の報告者の活動指針となっており、個人的に「棚原モデル」と通称して

いるこのスタイルを、いかに継承・発展させるかが現時点にいたってもなお、報告者の課題となり続けているのである。

1. 「棚原モデル」とは

報告者は何も「棚原モデル」が民間所在史料・保全活用業務において必ず参照しなければならないモデル、すなわち理想型だ、などというつもりはない。あくまで一つの型として提唱しているものに過ぎない。もともと、「棚原モデル」は報告者のオリジナルではなく、前任者の松下正和氏が生み出した用語である。氏はつぎのように述べている（松下正和「市民とともに支える地域の歴史文化―兵庫県丹波市での取り組み―」神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター編『「地域歴史遺産」の可能性』岩田書院、2013年、p338）。

住民と共同の目録取り・整理作業や、講演会やパンフ作成や、展示活動を中心とした古文書内容紹介、地区内ウォーキングをおこなうことにより、地区の古文書の保管意識の高揚や、内容理解の深化、個人蔵文書の再発見など、地域遺産の保全と活用への喚起という効果が得られた。また、「在野のアーキビスト」としての棚原住民は、地域で作られ保管されてきた歴史資料を、住民の手で代々守り伝えていく意義を自ら感じ取り、公民館の新設の際には、古文書を補完する「資料室」を新たに設置した。この「棚原モデル」は、我々が目指していた歴史文化を活かしたまちづくりをおこなう住民の理想的なケースであった。

上記の点だけみると、「棚原モデル」は住民が主体となった、先駆的な取り組みであるように思える。それは確かであるが、「棚原モデル」が必要とされる背景として、丹波市には地域の公文書類や歴史的公文書などを専門的に収集する施設がないという事情が横たわっている。幸い、丹波市域には村の文書を村役宅で持ち回る近世以来の慣行が生きている地域があり、こうした慣行を活用しつつ、区有文書などの地域史料を現地保存していく必要性が現状においては存在しているのである（以上、松下正和「兵庫県丹波市内での民間所

在史料の保存と活用について」国文学研究資料館編『社会変容と民間アーカイブズ』勉誠出版、2017年を参照のこと。したがって、地域の史料を現地で、しかも今後も「捨てられない」よう保存していくための方策として「柵原モデル」は有用だといえる。

2. 「柵原モデル」の展開

丹波市春日町柵原地区での取り組みについては、これまでもセンター関連の諸書で触れられているので、ここでは省略する。以下は報告者が「柵原モデル」を応用した地区の事例について二点紹介する。なお事例はいずれも丹波市内のものである。

①春日町歌道谷地区

同地区では、毎年8月に船城神社で保管している区有文書の虫干しがおこなわれていたが、混乱防止・作業効率化が年来の課題となっていたため、本センターに相談があった。2010年11月23日に神大による第1回調査がおこなわれたが、そこでは2009（平成21）年度より県民交流事業「歴史探索街道」が船城自治協議会（個別の自治会の連合体）において実施されていたことがわかり、来る2011年には同自治協議会のうち、歌道谷地区が受け持ちとなることが予定されていた。そこで、整理・保管の協力をするとともに、その成果を上記イベントに反映させる方向で話がまとまった。手始めに文書の付番・仮目録作成作業がおこなわれたが、ここで「柵原モデル」が応用された。すなわち、大学側のみで整理作業をするのではなく、自治会メンバーとの協働でそれが進められたのである。整理の成果は2011年11月20日の「歴史探索街道」において区有文書展示会・記念講演という形で地元住民に向け発表された。聴衆は100名を超え、小さな公民館に入りきらず庭先に立ち見が出たことを記憶している。

その後、現地での恒常的な調査活動は途絶えたが、2017年8月に保管状況等の追跡調査をおこなった。整理作業時の自治会長が現在も文書保管の係を担当されているらしい。

②氷上町氷上地区

同地区では、2002（平成14）年に公民館新築記念の地区文化祭で区有文書数点が展示されたことをきっかけに、一部の住民で区有文書に対する関心が高まった。その後10年以上の月日を経て2014年、地区の総会でようやく区有文書整理が承認され、有志による整理作業が始まったが、分量の多さ、方法の不統一で挫折しかかっていたところ、2015年1月24日、地域連携センターに調査の依頼をされた。この依頼を受けて2015年7月に報告者が現地入りし、そこで現地での整理作業と調査の開始を決定した。そしてここでもまた、「柵原モデル」を応用した。区有文書約600点を大学と住民協働で整理することとなり、全点ラベル張り作業もともにおこなった。作業の成果は2016年11月6日区有文書展示会・記念講演の形式で発表された。また神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター・丹波市教育委員会共編で『氷上区有文書の世界一解説と目録一』も刊行され、記念講演の直前に、当時の自治会長に本書を手渡す「目録贈呈式」も挙行された。

本地区での特徴的な成果として、第一に史料整理自体が地域イベントとなりうることの発見があったこと、第二に女性参加者が過半数であったことが挙げられる。古文書、歴史というと一般には難しい印象があるが、ラベル張りのような「文書が読めなくてもできる」作業を導入したことによって、参加者層が一挙に広がり、結果としてはこうした方々にも古文書の存在を認識させることになったと考えている。

3. 「柵原モデル」をさらに発展させていく上での課題

柵原地区にせよ、歌道谷地区にせよ、そして氷上地区にせよ、おそらく当面は人為的な理由によって区有文書が滅失する恐れは低いだろうと自負している。またそうなるために「柵原モデル」を運用したのである。とはいえ、最近痛感しているのは、現地保存が当面は安泰となった状況からいかに一歩踏み出すのか？ ということだ。先述の氷上地区の場合は、史料の輪読を住民と協働でしばらく続けていくつもりであるが、やはり「ブー

ム」が去った感は否めず、参加者は整理作業時に比べていくぶん低調である。もちろん人数がすべてではないのだけれども、できることなら一人でも多くの人に歴史を身近に感じてもらい、地域社会を継承するための基礎学として地域史料・地域史の学びをともに実践したいというのが、報告者の偽らざる願望である。では、そうなるためにはどうすればよいのか。整理作業は、なるほど古文書への専門知識がなくても参加可能かも知れないが、それを読むという段階に移行すると1、2回目は協働整理作業の効果もあって人数が多いとしても、3回目、4回目となるにしたがって、再び参加者は減少、かつ固定化する。やはりわれわれは整理作業による裾野の拡大にくわえて、「学び合いのスタイル」の構築についても逃げずに創意工夫していく必要があるように思う。

また、本センターが「住民主体の地域史づくり」というとき、よく言及する大字誌についてだが、これも言うは易く行うは難しであることを報告者は最近とみに痛感している。つまり、協働整理作業や古文書輪読まではいいとしても、先の目標として「大字誌づくり」を提案すると、とたんに地区の方々は怖気づいてしまうのである。かつて報告者も初学者時分にはそうであったように、歴史を書くということは、やはり難しい。また「大字」という範囲指定にこだわりすぎると、地区のなかで承認が得られないとか、書き手（人材）が得られないという困難にぶち当たる。思うに、大字誌は大字誌としても、それをつくる過程のメンバーは「大字」内の人物にこだわる必要はないのではないか。丹波市内にも大字誌作成の経験・技術を持っている「個人」は数名いる。そうした方々と、区有文書の整理から活用の段階へとステップアップしようとする地区との間で、技術交流のような場をつくることはできないだろうか。それは一つに地域連携協議会なのかもしれないが、できれば地元で、そうできないだろうか。

最後は、最近思っていることを書き連ねただけになったが、以上が「棚原モデル」のアップデートに向けて、報告者が有しているささやかな構想

である。

第2部 報告④

「学ぶ」市史から「調べる」市史へ

— 『たどる調べる尼崎の歴史』をめぐって—

松岡 弘之

尼崎市立地域研究史料館

尼崎市は2016年10月に市制100周年を記念して刊行した『たどる調べる尼崎の歴史』（以下、『たどる』）を刊行した。『たどる』は、「学ぶ」市史から「調べる」市史へをうたい、特に第Ⅲ部「調べる 尼崎の歴史」では、地理や各時代ごとに章を設けて、それぞれの分野の先行研究整理（入門編）、叙述のための素材・史料の紹介（史料編）、そして実際の調査や叙述の取り組み事例紹介（実践編）、という3節からなる構成をとる。いうなれば、「調べ方ガイド」という個性を持った自治体史の試みであるが、その根底には、なぜ調べ方ガイドが必要か、調べ方ガイドにはどのような内容が必要か、そしてそれを行政が担うことの意義は何か、という問いがある。2007年に刊行した『図説尼崎の歴史』や、レファレンス事例の蓄積を踏まえつつ、さまざまな市民ボランティアの力を借りながら、資料の保存・活用やデータベース構築を進めてきた尼崎市らしい市史といえよう。その意図などについては、『LINK』第9号（2018年）辻川敦論文を参照されたい。

報告では、紀要『地域史研究』第117号に収録した人見佐知子氏からの先行研究整理や史料と叙述者の対話のあり方をめぐる批判に答えるべく、『尼崎おんなたちの軌跡 1945年-2016年』（尼崎女性史誌をつくる会、2017年）など、市民自身の歴史叙述を紹介するとともに、『たどる』刊行後の学校連携、まちづくりに関わる若い世代との連携事例について報告した。多くの方に本書を手にしていただければ幸いである。

第2部 コメント①

香寺歴史研究会の活動

大槻 守
香寺町史研究室

1. 香寺歴史研究会の発足

『香寺町史』は町民が参加して完成させた『村の記憶 地域編』が前編であり、2005年3月、町制50周年を記念して発行された。この地域編執筆という貴重な経験を活かし、これからも町内の歴史遺産を調査し保存していこうと、翌年、地域編執筆者を中心に集まって発足したのが香寺歴史研究会である。

2. 研究会の活動

研究会規約にも掲げているのだが、活動の方針は①地域史の研究と大字誌の編さん、②地域の文化財や史跡の保存、③研究会・研修旅行等の実施、④香寺町史通史編編さんへの協力、などである。

主な活動とその成果は次の通りである。

①町内巡検の実施

毎年、地区を代えて担当地区の会員が準備から実施まで受け持ち行っている。同じ町内であっても意外に他地区を見ていないもので、実施する側も、参加する側もふるさとの再発見になると好評である。

②研究発表会の実施

年1回、講師を招いての講演と会員の研究発表を行う。小学生の地域探検の成果を聞いたこともある。

③石造物の悉皆調査

町教育委員会が未完で終わっていた調査を引き継ぎ、すべての石造物を年代を問わず、残欠類も含めて調査する。調査結果は『香寺町の石造物』(A4判・531頁)として2009年3月、姫路市から発行。

④年中行事の調査

各地区で行われているすべての行事の由来と内容を調査し、あわせて現在は行われていない行事

も聞き取りで収録している。調査結果は『香寺町の民俗行事』(B5判・396頁)として2010年3月、姫路市から発行。

⑤『年報 香寺町の歴史』の編集

会員の研究や研究会の実施事業等を掲載して会員に配布する。2006年度から発行し、現在11号である。

3. フォーラム「大字誌をつくる」

活動の中心となる大字誌の編さんは自治会との協働事業であり、町民の関心を高めることがまず必要と考えていた。そのため大字誌編さんの趣旨や實際を町民とともに考えるフォーラム「大字誌をつくる」を開催することにした。第1回は2011年に開き、町外の事例と町内の動きを発表してもらっている。以後、隔年に実施しており、本年度に第4回を予定している。

この間に大字誌の編さんは徐々に広がりつつあり、その編さん方式は自治会が編集委員を委嘱し、自治会予算で発行するというものである。これに本会と町史研究室が協力している。現在までに発行した自治会は相坂(2010年)、岩部(2013年)、土師(2015年)、そして田野(2015年)である。中屋は既に校正段階に入っており近く刊行されるはずである。

4. 『村の記憶』を書き継ぐ会

大字誌の編さんに欠かせないのが編集執筆に当たる後継者の育成である。今までは『村の記憶』の編さんに関わった町史編集協力者がその中心にいたが、刊行後10年を過ぎた現在、どの地区でもそれが難しくなっている。何とか人材を発掘する必要がある、大字誌を考える場をつくろうと自治会に提案してみた。地域を見直し、地域づくりに活かしていくという趣旨で自治会の協力を得、『村の記憶』を書き継ごうと会員を募ったところ、18人で出発することができた。それから1年間、相互に研さんする中で書き継ぎたいテーマを見つけ、それぞれが書き進めることとなった。現在、その成果であるレポートをまとめて『新・ムラ的生活史 I』として編集集中である。

ムラでは変化が大きく、確かに地域文化を継承

する力が衰退している。しかし、地域住民はここで生きぬくために地域を再生する場をどう築いていくかを模索している。大字を再認識するために大字誌の編さんが力になるであろうと思っている。

第2部 コメント②

佐用郡地域史研究会の活動について

竹本 敬市
佐用郡地域史研究会

はじめに

佐用郡は兵庫県の播磨北西部の岡山県との国境に位置し、人口は16000余人、限界集落の一覧に記載されています。少子高齢化社会がすすみ、研究会会員も高齢化しています。しかし、高齢者は「地域の宝」です。皆で一緒に頑張っています。2009年（平成21年）の8月に水害があった地域で、水害に際して被災史料のレスキューをしていただきました。すでに自治体史の編纂が完了しています。しかし、掲載されていない史料が豊富にあり、未整理史料も多くあります。今日的な課題として、地域史研究会の継続と活性化、自治体史の活用、未掲載史料や未整理史料の整理・保存・活用等があります。

佐用郡地域史研究会の活動

まず、佐用郡地域史研究会の活動について報告します。

佐用郡地域史研究会は平成7年にスタートしています。はじめは武庫川女子大の地主喬教授の指導で民俗を研究し、その後は、神戸大の横田冬彦教授（のち京都橘大、現京都大）の指導で近世史を中心に学んできました。各分野の講演会を実施するとともに絵馬の調査や佐用郡歴史年表（平成19年度発刊）作成にも取り組んできました。

平成17年の講演会では地域連携センターの坂江渉先生（現兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究室）を招いて「地域の歴史遺産の保存・活用と住民・自治体・大学」の講演をしていただき、そ

れから、連携センターとの関係が密となりました。平成20年の講演会では神戸深江生活文化史料館の大国正美先生を招いて「草の根史料館にかかわって」の講演をしていただきました。「地域遺産の保存と活用」について学びました。それから研究会の関心が地域の歴史資料の保存と活用の方向に進んでいきました。

佐用郡地域史研究会の最近の活動として、2009（平成21）年8月9日の水害以降の活動を報告します。

水害の後、歴史資料ネットワーク（＝史料ネット）の皆さんによる町内の歴史資料の被害状況調査と被災歴史資料レスキューが今日の研究会の活動の大きな基となっています。歴史資料の保存と活用に重きを置いた活動になっています。2010年3月27日に神戸大の松下正和先生をはじめとする先生方によって「歴史資料を水害から守る」講演とワークショップを実施してもらいました。その後、平成22年度から3年間、教育委員会と研究会とで「佐用町文化遺産再発見活性化事業」を地域連携センターの指導を受けながら文化遺産の再発見と地域の活性化に取り組んできました。町内の資料所在調査、未整理史料の調査整理、啓発冊子の作成、古文書の取り扱い、襖下張り文書の調査の仕方等を学び実践してきました。平成23年9月に襖の解体を実践的に学びました。襖の解体を実践的に学ぶ中で、その史料が千種川の高瀬舟に関係する史料であることが分かりました。そこで、研究会内部に古文書部会を設置（月2回活動、会員の10名前後が参加）し、襖の下張り文書の目録作成、解読をすすめながら、自分の関心ある内容について調べまとめようじゃないかということになりました。そして、調べまとめた内容を報告する研究発表会も実施しました。その内容は、今度発刊する「研究紀要」の第6号に執筆し発刊する予定です。現在では、大畑村文書の整理、翻刻を進めています。会員の中には、個別に佐用平福の田住家文書の翻刻に携わったり、三日月藩文書の翻刻に携わっている人もいます。そして、『田住家文書翻刻資料集』、『藩庁

史料 役方史料』ⅠⅡⅢ、『播磨国佐用郡林崎村文書』などを発刊しています。古くは、『吉田家文書目録』『下櫛田村三浦家文書目録』『櫛田村文書目録』『三日月藩文書』『播磨国三日月 江見家文書』も発刊されています。それらは、従前発刊されていた神戸大の『大谷家文書目録』『田住家文書目録』、兵庫県立歴史博物館の『安志藩大庄屋井上家文書』を参考にしています。

現在、佐用郡地域史研究会では上記の事業と同時に、定例の講演会、踏査会、研修旅行をも実施しています。(現在の研究会の会員数 32 名)

佐用郡地域史研究会の課題として、町民の関心は国史跡となった利神城に集中しています。地域史研究会は地道に活動をしている関係で町民の意識と若干遊離しているようにも思えます。近いうちに城に関する部会を新たに設置しようとも考えています。また、町史等への未掲載史料や未整理史料の整理・保存・翻刻・活用、そして大字誌づくりに取り組んでいきたいと考えています。進度は若干ゆっくりですが、継続的に取り組んでいくことを重視して取り組んでいます。また、後継者の育成も思っています。古文書の解読は我々高齢者にとって不思議と元気が出てきます。皆で、「よってたかって」頑張ってきたと思っています。

最後に、こうした活動や、地域史の中身に広がりをもたせることも大事と思っています。学校の先生たちとの連携ができればと思っています。地域史の教材化です。子ども達をとりこむ意味でも、子どもたちへ啓蒙の意味でも、地域史の教材化ができればと考えています。地域連携センターにおいても地域史の教材化を図るべく先生方へのアプローチ法を考えていただけたらありがたいと思っています。

地域史研究会の会員だけでは寂しいところがあります。大学の先生方との連携は必要不可欠です。地域史研究会でも皆で力を合わせ老体に鞭打って頑張ります。これからもご支援と協力を宜しくお願いいたします。以上で、佐用郡地域史研究会の活動についての報告を終わります。

全体討論

司会 (川内淳史・神戸大学大学院人文学研究科特命講師)

司会を務めさせていただきます神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターの川内と申します。よろしくお願いいたします。

本日は「住民主体の〈地域史づくり〉—平成大合併以後の状況の中で—」ということで4人の報告と2つのコメントをいただきました。

私が聞いて感じたことは、やはりなぜこうした地域史づくりが必要なのかということです。それについて端的に答えていたのは、西村さんの報告だったと思います。福島第一原発の事故、あるいはダム建設。地域が急に消滅してしまう可能性というものを考えた時、地域の歴史を残していくことの意義は極めて明瞭になります。特に原発事故に伴い100年単位で地域に帰れない人々の事例は私も耳にしております。そうした被災者の子供あるいは孫と言った子孫に地域の歴史を伝えていくためには、やはり地域史づくりは大事なことだと言えます。

また、地域の消滅は何も自然災害に限りません。人口減少に象徴されるように、これは各地域が多かれ少なかれ抱える問題でもあるのです。

ではこうした中で誰が地域史づくりをするのか。今日のテーマで言えばそれは住民ということになります。そこに大学や行政の関係者が携わっていく。今日ここにお集まりの皆さんが関わっていくことになるわけです。竹本さんのコメントにあったように高齢者層にも大事な役割がある、一方で若い世代をどのように主体の中に組み込むかという課題もある。

また「なぜ」、「誰が」他にも、「どうやって」という問題も取り上げられていました。これは「どうやって進めていくのか」や「どうやって参加者

を増やしていくのか」や「どうやって続けていくのか」といった様々な形で報告者から話しがあったと思います。

では討論に入っていきたいと思います。いくつか質問ペーパーを頂いておりますので、まずはそちらを紹介して議論していきたいと思います。

松下正和さんから、コメントの大槻さんと竹本さんのお二人に質問が出されています。大槻さんには「自治会の文書を調査されているとのことで、具体的な手法を教えてください」、竹本さんには「地域資料の教材化について教員時代の取り組みを教えてください」ときています。松下さん補足はありますでしょうか。

松下正和（神戸大学地域連携推進室）

松下です。ちょうど今ですね、自治会文書をどのように保存していくかということについて、地域連携センターの木村修二さんや室山京子さんや井上舞さんと一緒に考えています。

大槻さんの紹介された取り組みについて、具体的にどういった方々を巻き込んで取り組まれておられるのかを伺いたいです。またよその方が見に来た際には抵抗はないのか、ということについても伺いたいです。

それから質問ペーパーには書かなかったのですが前田結城さんにもお伺いしたいことがあります。私が丹波市を担当しているころにはできなかったのですが、女性の参加が多いということで、そのあたりの工夫について教えていただければと思います。

竹本さんには教員の現場での取り組み・経験について教えてください。西村さんのご報告にもありましたが、教員の多忙化が進む中で、私たちが教員の方へ連携を求めていく際には何についての配慮が必要なのか合わせてお答えくださればと思います。

大槻守

前の町史編纂のときに整理された自治会文書は近世から平成初期のもので、各自治会に保存して

あります。整理の見本はあるわけです。今回は平成に入ってからのものを整理しています。そのために一昨年に自治会長に集まっていた責任者についての話し合いを行いました。そして研修会を2回開いて整理の仕方を確認して、あとはそれぞれの自治会に戻って各自やってください、ということにしております。目録を取る際に表題の取り方等で少し問題も起こったようですが、困ったことなどは特に聞いておりません。

前田結城

女性や子供の参加について、なぜそれが可能となったかですが、まず1つは調査が始まるに際して私から女性の参加が大事であることを強調して言ったことが大きかったと思います。こういった活動における「敷居の低さ」という問題については、以前からずっと考えているのですが、例えば郷土史の研究会なんかはどうしても男性中心になっていて、場合によっては権威化してしまっていることもあるように感じます。そういった場合に風穴をあけるには女性の参加が効果的なんだと思います。

竹本敬市

地域資料の教材化ですが、地域資料はどの時代のものも各地域に遺されています。古代であれば遺跡、中世であれば「庄園」、それから近世であれば古文書ということで、現物が地域にあることが大事です。そして現物を扱うと子供たちも興味・関心が湧いてきます。ですから授業の中で現物になるべく取り上げるようにしています。最近の先生方は教科書を中心にして授業を組み立てています。それから地方ではなく中央の歴史が中心になっている。これは地域の身近な歴史の軽視だと考えます。それから「忙しい」というのは言い訳に聞こえます。たしかに事務的なことは多くなっていると思いますが、結局は時間の作り方の問題だと思います。特に小学校ではまだ融通がきく部分も多いと思いますし、時間を作ることは比較的容易なのではないでしょうか。先生のやる気の間

題です。身近なところにたくさん地域資料があることを、ぜひ地域連携センターの方々を中心にうまく学校にアピールしていただきたいと思います。そうすると地域資料の教材化というものが進み、教育の裾野も広がっていくのではないのでしょうか。地域連携センターの課題として、いかに学校の先生にアプローチしていくか。これがあげられると思います。

司会

ありがとうございます。次の質問ペーパーに移ります。園田学園女子大学の柏原康人さんから2点質問がきています。1点目は「地域資料の中には出せない、見せられない資料がありますが、どのような資料が公開できないものか。またそういった資料が出てきたときにはどのような対応をしているのか教えてください」。それから2点目として、「調査をする過程でいわゆるネガティブな記憶が掘り出されることがあると思いますが、地域としてどのような記憶をどう受容して記述していくのか教えてください」。以上2点の質問をいただいております。1点目については松岡さんに、2点目は森下さんに市史編纂における聞き取り調査の経験などからお答えいただければと思います。

松岡弘之

尼崎の事例を紹介したいと思います。尼崎市では地域の古文書や記録を集める一方で公文書の収集も行っていますが、いずれも開示できないものがあります。例えば公害被害者の方の医療情報ですとか、土地区画整理の際の土地や財産の交換に関するものとかですね。こうした問題は尼崎の公文書管理の中では大きな課題となっています。何年たつたらどこまで開示ができるのか。実はこのルールはまだ尼崎市にはありません。国はあります。いくつかの自治体ももっています。尼崎を含め兵庫県内ではこの課題への取り組みが遅れているというのが実際のところですよ。

いまのは公文書に関することですが、地域の記

録についても課題はあります。例えば最近「長吏」に関する記録を入手しました。城下の治安に関わる身分ですね。ただ、史料の出所などを含めて考えると被差別情報があるのではないかとということで懸念されました。ではこうした史料をどのように活用していくのかということで、身分制を専門にしている先生に調査をお願いしたり、問題がありそうな部分をはずして公開するといった処置を講じました。

やはり公開できない史料があることはご承知いただいて、それを含めて後世に遺していくことが大事であり、そのことを理解していただくことも課題だと考えています。

森下徹

いい事例が思い浮かばないのですが、聞き取り調査は本当に色々なお話しが出てきます。それで1点目の質問と絡めて言うと、実は聞き取り調査をやる中で一番楽しいのは、私の感覚では調査中でも後でもなく、打ち合わせのときです。地域に最初に入ってどこにどんな史料があるのか、あのテーマだったらどの人に聞くのがよいとか、そういうことを聞いてまわっている間が一番楽しいです。そこではネガティブな話も含めてたくさんを知ることができます。女性でしたら嫁姑問題とかですね、その時は聞けるんですね。ただ調査当日になるとあらたまってしまう。お互い構えてしまって、どちらかというと話しても大丈夫なことに終始しがちになります。さらに活字化するとですね。「ここはやめておいて」といったように削除希望が出るんですね。我々からすると「一番おもしろいところなのに…」ということが多々ありました。何を語っていないのかを記録するというのは大変難しい問題ですけれども、調査する側としては事前の段取りから振り返ると、語られなかったこと存在には気づきます。そうしたものを後世にどう残していけばよいかは課題だと考えています。それから和泉市史では収集した史料をもとに文書館の設立が方向性として決まっていますが、市史の調査では見せてもらえた史料

が、市民への公開となると難色を示す方もいます。内容的に開示できない史料も含めてこの点も課題ですね。

西村慎太郎

尼崎との関係で私の勤める国文学研究資料館について1つ話があります。フロアと共有したらおもしろい議論になるかなと思ひまして情報提供させていただきます。尼崎の史料館の方がある地方文書の撮影でうちの館に来ているのですが、撮影した史料の一部が尼崎では公開不可になっているんですね。でもうちの館に来ると全部閲覧できるんですね。つまり行政的には見せられない史料はたしかにあるんですが、うちの館はあくまでも研究利用を前提にしていますので、全点公開が原則です。もちろん法律的にシャットダウンされているものもありますが、基本的に近世のものは歴史資料であり、差別の問題についても、差別が醸成された歴史的経緯や過程があるはずなので、それは研究して議論したほうがいいと。だから公開のスタンスをとっています。しかしこれは研究機関であるから可能なのであり、自治体の博物館では難しいのはその通りだと思います。

司会

ありがとうございます。柏原さんよろしいでしょうか。

それではもう1点質問ペーパーをいただいていますのでそれに移ります。神戸芸術工科大学の藤本隆さんからの質問です。「今日は平成の大合併の影響を受けた地域や人口減少が顕著な地域の事例報告が多かったと思います。しかし、そうした影響が少ない大都市部でも歴史をめぐる問題は深刻だと思う。例えば阪神・淡路大震災によって阪神間では歴史的景観の喪失や伝統的建造物の破壊がありました。また人口流動によって震災後に移住してきた人々にとって、神戸は「モダンな都市神戸」以上のものをもっておらず、歴史や文化はそのイメージ飲み込まれてしまっている。そうした中で専門性をもたない市民の方と共同で地域

の歴史や文化の継承保存活動と情報発信に取り組んでいます。何かアドバイスやご意見があればお願いします」とのことです。藤本さん補足がありましたらお願いします。

藤本隆（神戸芸術工科大学）

この他に聞き取り調査もやっています。いま80代の方を中心に、当時のライフスタイルや教育についてお話を聞いています。それを記録して本にしたりウェブサイトを立ち上げたりして情報発信していこうと考えています。本日の報告は大変興味深かったのですが、都市部の住民が歴史文化の継承活動に参加する方法として、アーカイブズの可能性とかですね、何か示唆いただけることがあれば教えてください。

司会

それでは報告者の中からは都市部の問題ということで西村さんにお答えいただきたいと思います。また市民によるアーカイブズ活動ということで、震災資料の保全活動に長年携わっているフロアの佐々木和子さんにもお答えいただきたいと思います。

西村慎太郎

さきほど藤本さんとは少しお話しさせていただきました。例えば写真アーカイブズでいうと戦前に限らず昭和30年・40年代の写真資料は非常に重要になってきています。やはり都市部では写真と古文書が一緒くたに置いてあるのが普通です。ですからそれらをまとめてアーカイブする必要があります。質問にありましたアマチュアとの共同についてですが、写真の目録を取るのに一番大変なのは「どこ」と「誰」という被写体の特定なんですね。ただ年配の方に聞くと、これは誰で、ここがどこの土地で、だいたい何年くらいのものかがたちどころに分かります。さきほど「高齢者は宝」というお話しがありましたが、まさに写真資料のようなものこそ、高齢者の方々の協力が必要だと感じています。私が活動している東京都の

調布市を事例にあげますと、調布はオリンピックの際に大規模開発をしまして、その前後で景観が全く変わってしまいました。ですので、その地域の写真については地元の郷土史の先生にお話しを伺ったりして目録を取っています。ただやはり分かる人が少なくなっている問題はあります。

佐々木和子（神戸大学地域連携推進室）

突然の指名で困っておりますが、震災に関連して民間でアーカイブの保存活動を20年近くやってきた経験をもとに少しお話をさせていただきます。私はその間、震災に関わる資料を収集する活動を続けてきました。それが20年続けてこれた理由は、やはり場をどうやって設けるかを考えてきたことだと思います。かなりの問題がいまはパソコンがあれば発信・受信できるわけですが、これまでの活動の中で感じたことは、資料は人づてにやってくるものだという事です。人が集まるとそこに資料も集まってくる。私たちは幸いなことに、そうした場を提供して下さる方々に恵まれていました。それは公民館のような場所でも機能すると思います。やはり史料や人から話を聞く際には、人が集まる場が大事だと考えています。その場では集まった人から史料を読み解くための思わぬヒントをいただきたりします。さきほどの写真で言えば、映っている人や場所の特定ですね。アーカイブについては色々議論がありますが、私はやはり史料を中心として人が集まる場、そしてそこに史料がさらに集まってくる。そういった場の構築が大事だと考えます。

これに付随して、私は自分たちの活動を例えばニュースレターなどを通じて発信していくことを心がけてきました。活動の記録を残すということです。それが思いがけず20年後に見たりしますと、忘れていたことを思い出させてくれたりします。それが次の活動の励みとなる。参考になるかわかりませんが以上です。

司会

ありがとうございます。奥村さんからお願い

します。

奥村弘

都市部における問題は「人」がいても「地域」がないということだと思います。いざ地域のことを調べよう・考えようとしても、昔からの住人は誰もいない、というケースはいくつも聞いたことがあります。神戸市でもそうした状況が進んでいます。そうした中で、いかに地域を作っていくか。そこで大事になってくるのは、近世以来の村的な結合といいますか、そうした地域が残っていくならそれを大事にしていくことが1点あります。

それと市民レベルで地域の問題を考えようとする動きを大事にすること。本日神戸史学会の方もいらっしやっていますが、こうした市民レベルの活動を我々の地域連携センターは支援する形で共に活動しています。この問題はぜひとも皆さんに考えていただきたいです。

それと図書館や博物館や文書館といった行政的支援は都市部では比較的实现すると思うのですが、地方ではそれが困難な場合が多いと思います。しかし悲観していても仕方がないので、そうした施設の設置をみんなで考えていくことが大事になると思います。

司会

藤本さん、よろしいでしょうか。こちらでお預かりした質問ペーパーは以上となります。

あと少しだけ時間がありますので、ここからはフロアからの質問を受け付けたいと思います。

松本充弘（神戸大学大学院人文学研究科）

松本と申します。2つほどお尋ねしたいことがあります。森下さんと大槻さんにお伺いしたいのですが、1つは史料整理・活用の問題です。私は篠山市立中央図書館の地域資料整理サポーターの方と一緒に活動しているのですが、篠山市を構成している旧丹南町に関する二次史料がたくさん図書館にあります。それは丹南町が町史を編纂する際に集められた史料のコピーです。このコピーの

現物は編纂室が閉鎖された段階で所有者に返却されたと思うのですが、現在の所在ははっきりしません。こうしたコピー、すなわち二次史料の整理・活用の方法についてアドバイスをいただければと思います。あくまでも篠山市の一部に関する史料となりますので、活用の際には市全体への活用という視点を考えています。この問題は行政の立場の方でしたらどう考えるか気になるので森下さんにお答えいただければと思います。

もう1つは、合併前の自治体と合併後の自治体の問題です。これは大槻さんにお尋ねしたいのですが、香寺町は姫路市に合併されました。そのこと自体が香寺町史の編纂や地域の人間関係に影響与えたかどうか、あるいはそのことでご苦労されたことがあるかお聞きしたいです。

森下徹

和泉市は平成に合併はしておりませんので、適当なことを言えるかどうか不安なのですが、調査によって様々な史料が地域にあることは確認しており、さきほど史料をどこまで公開するかで議論しましたが、和泉市ではできるだけ公開するようにしております。これはやはり活用してもらうためですね。それから文書館の設置を考えているという話をしましたが、すでに市史編纂から20年経過しておりますので、もう一度所在の再調査をしたいと考えているのですが、どうなっているか正直不安なところもあります。今日のテーマである住民主体の〈地域史づくり〉みたいなことは和泉市ではまだ充分できておりませんが、二次史料なんかも含めてまずは調査をして史料を遺していくことが大事なんではないでしょうか。

大槻守

合併と地域史づくりの関係の問題になると思うのですが、香寺町が姫路市と合併した際には、最初はマイナスに感じる部分がありました。地域独自の歴史を書いていくことに市は否定的でしたので、行政に頼った形での活動はできなかつたんですね。ただ、ある意味では行政区域にとらわれな

い自分達の地域の歴史を書くことができたわけです。それはそれで良かったと思います。一番困ることはお金の問題です。自前でやらなければならない。いま頼りにしているのは自治会の予算です。個人でやるのではなく自治会で地域の歴史をまとめようとしております。最近兵庫県助成金を受けております。ただ、自分達自身でやらなければならないことは多いです。

例えば、自治会の資料は自治会で保存しますが、個人資料の場合、現物は姫路市に移管しておりますがそのコピーを保存しています。それを複写・製本しているのですがそれを公開する場所がない。これも困っていることなんです、図書館への架蔵もお願いしてみたのですがかきませんでした。なんとか場所を確保するのが今後の課題です。

それから地域内の人間関係ですが、幸いなことに特に問題になったことはありません。地域の歴史を書きたい人があつまっていますが、それをめぐっての対立などは起きておりません。

司会

松本さん、よろしいでしょうか。それでは時間もせまっておりますので、最後に報告者・コメントの方から一言ずついただいて討論を終えたいと思います。

竹本敬市

今まで地域連携センターの方には色々ご支援いただいているのですが、これからもぜひ見捨てないで引き続きご支援をいただければと思います。

大槻守

本日のテーマである「住民主体の〈地域史づくり〉」を実践しているわけですが、お金の問題をはじめ困難なことも多いのですが、引き続きご支援いただければと思います。

松岡弘之

県内の事例をたくさん聞くことができ大変勉強になりました。史料館の人間ですので、地域の皆様が学びの主体として地域の歴史を再発見する扉が開かれるような拠点として頑張っていかなければならないと強く思いました。ありがとうございました。

前田結城

今日はありがとうございます。〈地域史づくり〉ということですが、突き詰めて考えると「地域史を書く」ことになると思います。地域の皆さんと活動をして、いざ自分で地域史を「書く」となったときのことを考えると、「書く」ことについて常に研鑽が必要だなと感じています。今後も地域史研究に重点をおいて研究を続けたいと思います。まあこれからも頑張るということで、よろしく願いいたします。

西村慎太郎

今日の話は、原発やダムで無くなった村の話といった暗い内容でしたが、個人的には悲壮感とか使命感とか責任感をもって活動しているわけではありません。「楽しさ」で自分は動いているのだと思います。ありがとうございました。

森下徹

今日は大阪から呼んでいただきありがとうございました。今日紹介した本は一般の書店でも買えるようになりました。『地域歴史遺産と現代社会』で村井良介さんにも紹介していただいております。ぜひ興味をもった方はですね、ネットなどを通じて買っていただければと思います。よろしく願いいたします。

司会

報告者・コメントの皆様ありがとうございました。最後に奥村さんより本日のまとめをお願いいたします。

奥村弘

今日はありがとうございました。西村さんからありましたけれども、こういう時代や状況だからこそ、みんなで集まって活動することで「楽しさ」を感じる事が大事だと思います。そしてその「楽しさ」の中により深く地域の歴史を知ることができる。こうしたことを含みこんでいるがゆえに、私達の活動は続いているんだと思います。そうした活動をより活発にするための様々な工夫が、今日のお話の中でいくつもできてきました。前田さんの話に「モデル」という言葉がありましたが、各地で生まれた工夫の方法は共有して、さらに深めていくことが大事だと考えています。

今回のテーマには「平成の大合併」があげられていました。つくづく感じるのですが、合併の是非はさしあたっておいておくとしても、合併した時にそれぞれの地域の歴史をつぎの世代にどのように伝えていくかについてはほとんど考えられていません。そして、そうした試みを行うことがますます難しくなっているのが現況です。しかし、こうした中で我々は地域の歴史の継承に関する活動を展開できている。このことの重要性は確認しておく必要があるでしょう。地域の歴史をめぐって住民だけでなく行政や大学の関係者による横のつながりはこれからも強くしていきたいです。そして毎年1回はこういう場をもって交流を進めていきたいと考えていますので、今後もどうぞよろしく願い申し上げます。今日はどうもありがとうございました。